

『たったひとつのズルいやり方』 作…岩本憲嗣

■登場人物

邊見馨 (へんみかおる・女性・17歳／7歳・女性剣士)
高村竜臣 (たかむらたつおみ・男性・22歳／32歳・人斬り)
高村虎基 (たかむらとらもと・男性・20歳・竜臣の弟)
はな (はな・女性・24歳・情報屋)
邊見亮順 (へんみりょうじゅん・男性・
30歳・兼鶺藩側用人筆頭)
邊見まち (へんみまち・女性・25歳・馨の母)
杉浦貞勝 (すぎうらさだかつ・男性・28歳・亮順の部下)
家臣1〜3
浪人1〜3

○明治7年・山寺の庭先

山深い中にあるうらぶれた山寺。
刀を杖代わりにして衰弱した様子
の竜臣がやってくる。竜臣は右眼
が刀傷で潰れている。竜臣、満月を
仰ぎ見る。

竜臣「塗鬼(とき)の呪い…抗うことは出来ないってことか」

咳き込む竜臣。馨がやってくる。

馨 「こんな所で何を…」

竜臣「なあ馨。俺はまるで月だ」

馨 「月？」

竜臣「満ちて尚、今に満足出来ずまた欠け

再び満ちんとする。結局は同じ姿にしかなれぬというのに」

馨 「何の事ですか。それより床にお戻り下さい。薬もきつとまだなのでしよう。すぐに準備を……」

行こうとする馨の腕を力なく掴む竜臣。

馨 「え……」

竜臣「情けねえな。呪いから脱したくとももはや刀など到底握れやしない」

馨 「呪い？」

竜臣「馨。俺の願いを叶えてはくれないか」

竜臣、掴んだ馨の腕を強く握る。しかし全く力が入っていない。

馨「……これって……」

竜臣「格好悪いけど、俺にはもう無理なんだ。時が……もうない」

馨「……孤児（みなしご）となった私を今日まで育てて下さったのは貴方様です。私がそれに少しでも報いることが出来るというのならば……どんな願いであろうとも」

竜臣「そうか……すまない、馨」

竜臣、馨に抱き付く。

馨「え？」

竜臣「いや、すまなかった」

竜臣、馨の首筋に噛み付く。

馨「なっ、何をなさいます!？」

竜臣「俺の願い。討って欲しい男がいる。

俺の代わりに、そいつを斬れ」

馨「斬る……分かりました。その願い必ず遂げてみせます。してその男というのは……」

竜臣「恩に着る」

竜臣、馨から離れる。竜臣の姿は先程までとは一変。白髪の老人となっている。

馨「え!?!……これは……一体……」

竜臣「あとは……これを……お前に」

柄に裝飾のされた刀を差し出す竜臣。馨、戸惑いながらもその刀を握る。すると刀から眩い光が放たれる。同時に刀から馨に様々な情報が流れ込む。苦しみだす馨。

馨「ぐっ!うっつ!!いや……いやああああ!!……!!」

○10年前。元治元年・山寺の庭先

兼鶺藩の寂れた山の中にある古びた寺。

庭先に拵えた畑を耕す虎基。どこかおぼつかない手つき。

そこに華美な格好をしたおはながやってくる。

はな「下手くそ」

虎基「おはな殿？」

はな「何よその素っ頓狂な顔。探したのよ。京から突然姿を消したかと思ったら、こんな東国の山の中で百姓の真似事なんてやってたワケ？」

虎基「真似事ではありません。拙者はもう……」

はな「人斬りは辞めました……とでも言うんでしょう?馬鹿馬鹿しい。アンタはそれでよくてもこつちがおまんま食いっぱぐれちまうでしょうが。仕事持ってきたよ。アンタじゃなきやダメなんだ、働いておくれ、高村弟」

虎基「買い被っておられる。拙者は兄上なしでは何も出来ませぬ」

はな「その兄貴が生きているかもしれない。そう聞いても働く気はないかい」

虎基「今……なんと!？」

はな「気になるでしょ？そりやそうよね、もう半年も行方知れずのたった一つの兄君だものねえ……知ってることお話ししてあげたいのはやまやまんだけど……ねえ？分かるでしょ？」

虎基「分かり申した。引き受けます。ですから……」

はな「話が早くて助かるってものね」

寺の縁側に腰を降ろすはな。近寄る虎基。

はな「アンタ、朔月（さくつき）って奴のこと知ってる？」

虎基「いや……それと兄上と何か関係が？」

はな「焦らない焦らない。朔月ってのはね最近京を騒がせている人斬りのこと。誰から情報貰ってるのか知らないけど佐幕派の大物を次から次へと斬って回ってる。いや、突いて回ってるが正しいのかも」

虎基「突いて……もしや！？」

はな「そう、殺られた連中のほとんどが鋭い突きで絶命している。あたしも一度仏んさんを見たけれど、あれはまるで……」

虎基「兄上？」

はな「朔月が騒がれたしたのは半年前。丁度アイツがいなくなったのと同じ頃」

虎基「し、しかし兄上は……」

はな「アンタの目の前で黒頭巾の男に殺された。アンタは助けることも出来ずそいつに気を失わされて……」

虎基「……拙者は」

はな「でもこうも言えるでしょ。アンタはアイツの亡骸を見たワケじゃない。死んでる確証なんてどこにもない。ってことは朔月がアイツだってことも十分考えられる。違う？」

虎基「確かに。おはな殿、有難うございます！拙者その朔月というのを探しに……」

はな「ちよちよちよ、話はまだ終わりじゃないわよ。この朔月、ちよいと曲者でね……実は二人いるって話なの」

虎基「二人？」

はな「そう、同じようなまったく同じ日、同じ刻、全然違う場所で朔月の仕業としか思えない人斬りが起きているの。それも何度も」

虎基「それは一体？」

はな「しかも面白いことに、この二人目の朔月はどうも最初の朔月を追っているように感じられる。朔月が京から東へ移動するのと同じくして二人目も東へと……」

虎基「もしや、二人目は最初の朔月の命を狙っている？」

はな「さあ。でもね確実に言えるのはあいつらはあたしにとって商売敵ってこと。これまでにそうだったし、きつと次の……アンタに頼む仕事も」

虎基「人斬り」

はな「そう。ここ兼鵜藩側用人筆頭である邊見亮順が今夜江戸へ出立するわ。邊見は藩の佐

幕派の大元締め。こいつがいなくなれば藩の大勢はガラリと変わる」

虎基「拙者はその者を斬れば良いと」

はな「そう。そしてそこには恐らく……」

虎基「二人の朔月が……あい分かった」

虎基、持っていた農具を捨てると寺の中に入っていく。やがて刀を携えて現れる。

○邊見邸（夜）

兼鶉藩側用人筆頭・邊見亮順の私邸。亮順が貞勝従えて出発の準備をしている。そこに慌てた様子でまちがやってくる。

まち「かような時間にどちらへ向かわれるおつもりです」

亮順「何だお前か。予てより話していたであろう。勤皇派の連中が諸藩と通じ良からぬ企てをしている証拠を掴んだ。一刻も早く江戸の殿にお知らせせねばならぬ。これを知ればきつと殿とて考えを改められ……」

まち「それは殿が戻られてからではならぬのですか？」

亮順「それでは遅すぎる」

まち「ならば、せめて明朝にご出立下さいませ。夜道は危のうございます」

亮順「どのみち江戸まで二日はかかる。何処かで夜道を進まねばならぬ。ならば見知ったこの地ので夜を迎えるが得策であろう。行くぞ貞勝」

貞勝「はっ」

まち「行かせませぬ!!」

貞勝「まち様……」

亮順「そなたが我が身を案じてくれるのは嬉しい。されど私とて案じているのだ、この藩を。この国を。それには一刻を争う。どいてくれ」

まち「……」

亮順「まち」

まち「では……では私も」一緒にします」

亮順「何を申すか。それではあの子はどうする」

まち「貞勝。少しの間あの子の世話を頼みました。いいですね」

貞勝「なっ……しかし」

まち「あの子は貞勝に懐いています。数日

であれば問題ないでしょう」

貞勝「しかし……」

亮順「分かった。貞勝、まちの言う通りにしろ」

貞勝「亮順様!？」

亮順「こやつは一度決めたらなかなか譲らぬ女。娘と何ら変わらん」

貞勝「た、確かにどちらも頑固と申しますか……」

まち「貞勝！」

貞勝「ひっ！すみません！！」

まち「あの子を頼みましたよ。さあ参りましょう」

亮順とまちが去る。

貞勝「どうかご無事で……しかし……参った。お世話と言っても……」

貞勝の背後に寝間着姿の幼い馨がやってくる。

馨(幼)「騒がしいのう。何事だ貞勝」

貞勝「なっ！お、お、起きられていたのですか」

馨(幼)「今起きたのだ。母上の声が聴こえた。何かあったのか？」

貞勝「そ、それはその……申し訳ありません！某(それがし)が稽古をしていただけです。その……母君の物真似の」

馨(幼)「物真似？」

貞勝「はい。いつでもまち様の影武者を務められるようにと鍛錬を。(声真似をして)これ、夜更かしとは何事ぞ！早う床につくのです！！……ね？」

馨(幼)「……………」

貞勝「何か言ってくだされ！」

馨(幼)「分かった。貞勝の言う通りなのであろう。下がってよいぞ」

貞勝「え？しかし……」

馨(幼)「下がれ。それともそなた厠にまでついてくると申すか」

貞勝「なっ！す、すみませんでした！！」

貞勝が慌てて去る。

馨(幼)「まったく、嘘が下手な男だ」

馨が走り去る。

○兼鶉藩領内・夜道

夜空には上弦の月が浮かんでいる。

亮順・まちを乗せた籠と数人の家臣たちの列がやってくる。

○兼鶉藩領内・高台

高台から亮順たちの列をみつけるはなど虎基。

はな「いた。あれだね」

虎基「朔月は……まだのようですね」

はな「ほら、先越される前にさっさと始末しといて」

虎基「あい分かった」

虎基が去る。

はな「さて……どうなるものかね……」

はな、再び亮順たちの列の方を振り返る。そこに何かをみつける

はな「ん！？あれって……」

○兼鶺藩領内・夜道

亮順たちの籠の列の前に黒頭巾の人影（朔月）が立ちふさがる。列が止まる。

家臣1「何奴！？そこをどかんか！！」

朔月「……」

家臣1「どけと言っておるであろう！！」

近づく家臣を瞬く間に一突きする朔月。その太刀は柄に装飾が施されている。動揺する家臣たち、一斉に刀を抜く。まちと亮順が籠から出てくる。

まち「何事です！！」

朔月「……アイツを狙って……きつと」

朔月が亮順めがけて突進。家臣たちが朔月に斬りかかる。みるみる家臣たちを斬り倒していく朔月。朔月、亮順に斬りかかる。

まち「おやめなさい！！」

朔月「！？」

まちの声を聴き、何かが記憶の奥底でひっかかり太刀の速度が落ちる朔月。まちは持つていた短刀で朔月の太刀を止める。

亮順「まち！！」

まち「早く！屋敷までお逃げ下さい！今ならまだ……」

亮順「しかし！」

まち「藩の為、国の為！違うのですか！」

亮順「ぐっ！」

亮順、踵を返すと走り去る。朔月はまちを力任せに弾き飛ばすと亮順を追う。しかし亮順の逃げる先にはもう一人の朔月が立ちただかる。

もう一人の朔月、亮順の腕を捻りあげると首元に太刀を宛がう。その太刀の柄にもまた装飾が施されている。

朔月2「やっとお目にかかれたな。俺の偽物」

朔月「朔月……そう、これは朔月、あの人ではないのです。だからこそ……あの方が想いを！！」

朔月、もう一人の朔月に斬りかかる。もう一人の朔月、刀の柄で亮順を殴りつける。

亮順、その場にうづくまる。もう一人の朔月、斬りかかる朔月に応戦。互いに突きを巧みに使い互角の攻防を繰り広げる二人。

朔月「この太刀筋やはり……違う！違う違う！！」

もう一人の朔月に斬りかかる朔月。それをいなし続けるもう一人の朔月。鏝迫り合い。

朔月2 「気持ち悪い奴だな。まるで俺みたいな……ん！？おいお前、その太刀！？」

その隙をつき逃げようとする亮順。

朔月2 「おい待て！」

もう一人の朔月、亮順の手を掴む。

逃げる亮順に引つ張られ体勢を崩すもう一人の朔月。

朔月 「今なら！！」

朔月、もう一人の朔月に突きを放つ。そこにまちが走りこむ。まち捕まった亮順を庇うように間に入るとそのまま朔月の太刀に突かれる。もう一人の朔月は応戦しようとして太刀を構えるが、その隙に亮順に逃げられる。

朔月 「まだ！今度こそ！！」

朔月、まちから太刀を抜くともう一人の朔月に追撃。それを受け止めるもう一人の朔月。すると背後から亮順の悲鳴が聴こえる。

亮順 「うわあああつ！！」

朔月たちが振り返るとそこには虎基の姿。虎基の足元には亮順の亡骸。

朔月2 「おいおい、嘘……だろ？」

虎基 「二人の朔月……太刀を合わせれば兄上か否か、自ずと分かる！！」

虎基が朔月たちに斬りかかる。応戦する朔月に対し、もう一人の朔月は避けてばかりやがて虎基の太刀がもう一人の朔月の頭巾を斬り裂く。そこから姿を現したのは竜臣であった。この時竜臣の右眼にはまだ傷がない。

虎基 「兄上！？」

朔月 「……本当だ……本当に……なんで……なんで私は……」

竜臣 「よう、久しぶりだな」

虎基 「やはり兄上だったんですね。拙者は心配申し上げておりました。今まで一体どこで何を……」

竜臣 「そういうのは後にしてくれ。それより……アンタ何者だ」

竜臣が朔月に斬りかかる。一転、応戦もせずにかわしてばかりの朔月。

竜臣 「どうした？さつきまでと違うんじゃないかねえか？」

朔月 「出来ない……その姿をみてしまっは……私は……すみません、竜臣さん」

竜臣 「俺を知ってるのか？それにその太刀……アンタも俺の同類なのか？」

急に頭を押さえて苦しみだす朔月。

朔月 「ぐっ……うっ……ぐわああああ」

竜臣 「何だ何だ一体」

虎基 「兄上、誰か来ます」

そこに幼い馨が寝間着のまま駆けてやってくる。

馨(幼) 「父上！母上！私を置いてどこへ行くのです！！父上！！……母……」

上……!?!」

駆けて来た馨、そこに父母の亡骸を見つけ茫然と立ち尽くす。

馨(幼)「父上……母上……」

朔月「ぐっ、うわああああああ!!!!」

竜臣、朔月から頭巾を剥ぎ取ると馨に被せ、押さえつける。

馨(幼)「きやつ!!な、何をします!!これは一体何事のですか!!」

竜臣「おい」

虎基「し、しかし!!」

竜臣「馬鹿。一人で残されるってのは辛いんだよ。やれ」

虎基「……あい分かった」

虎基、太刀を構えると馨に一閃。

馨(幼)「いやああああああ!!!!」

朔月「いやああああああ!!!!」

馨、その場で動かなくなる。竜臣は馨から頭巾を剥ぎ取ると手を合わせる。

竜臣「すまない。俺の勝手のせいで」

虎基「兄上、この者……」

竜臣「……女子(おなご)?」

竜臣が朔月の元に歩み寄る。頭巾の下から出て来たその顔は馨であった。

○元治元年・山寺

満月に照らさる中、塗鬼の太刀を握り苦しみ続ける馨。

馨「ぐっ……な、何なのです、刀が離れない」

竜臣「すまない」

馨「教えて下さい!!……竜臣さんのその姿……」

竜臣「俺は時に逆らって無理矢理しがみついた。その報いだ。俺の想いと呪いをお前にくれてやる」

馨「の……呪い?」

竜臣「そう、時の呪い。時を塗り替える鬼、

塗鬼となったお前は時を自在に跳ぶことが出来る。だから……俺の願いを叶えて欲しい。やり直して欲しい」

竜臣、咳き込むとその場に片膝立ちになる。

馨「竜臣さん!ぐっ……」

馨、竜臣に駆け寄ろうとするが、太刀からくる苦痛でその場から動けない。竜臣、震える手で懐から一通の書状を出す。

竜臣「全ては……ここに書き記した。は、ははは、俺の汚い字だが、長年一緒にいたお前になら読めるだろ。俺からの最初で最期の手紙だ」

竜臣から目を背ける馨。

竜臣「そんなに嫌うな。別にいやらしいことなんてしやしない」

馨「な、何を言うのです！当たり前でしょう！！」

竜臣「何をそんなに怒る。まあいい。単刀直入に訊くぞ。お前……俺と同じ塗鬼だな」

馨「……………」

竜臣「分かりやすい女だ」

馨、涙ぐむ。

竜臣「何故泣く！？前言撤回。ワケの分からん女だな」

馨「嬉しいのです。……また、お会い出来て」

竜臣「また？」

馨「仰る通り……私は塗鬼です。今より10年の後より時を遡り、半年程前にやって参りました」

竜臣「でもって俺を狙ってた……何だ、10年後に俺は相当誰かさんに憎まれてるってワケか」

馨「ち、違います。けれど……けれど、これはその……すみません。どうしても成さねばならぬ事なのです！！」

馨、竜臣の腰からから塗鬼の太刀を抜くと竜臣に突きつける。

竜臣「抜け目のない奴だな。どうした？俺を討つ為に来たってことなんじゃねえのか？」

馨「どうして……貴方は」

馨、その場に塗鬼の太刀を落としてしまう。

竜臣「許してくれるのか。優しいな」

馨「私は……」

竜臣、引き出しを開けると馨の塗鬼の太刀を取り出し放る。

馨「これは」

竜臣「優しくしてくれたお返しだ。んなもの2本も持っても仕方ないしな」

馨「けれど私は……」

竜臣「黙って斬られる気はねえよ。まあ俺が弱ってりや別だけどな。参ったことにもう5日も人を斬ってない」

馨「それでは……」

竜臣「何、ここにいりやあ黙っててもはなが仕事もってくるから心配ない。そうだ、次の仕事はお前も手伝ったらどうだ」

馨「え？」

竜臣「この時に生きる人の命を狩ることで己が存在をその場に留めさせる。殺し続けなければてめえが死んじまう。まったく迷惑な呪いだが、人斬り稼業にはおあつらえ向きな呪いでもあるってもんだろ」

馨「……私は」

竜臣「塗鬼のくせに人を斬ることに悩んでるとか言うなよ。これは無闇な殺

生なんかじゃねえ。俺らが生きる為に必要な殺生だ。……なんててめえ勝手かもしれんがな」

竜臣が去る。

馨 「生きる為……そう……想いを途絶えさせるワケには……」

馨、塗鬼の太刀を半分程抜き刃をみつめるとそのまましまう。

○邊見邸・中庭（夜）

夜空には満月が浮かんでいる。月をじっとみつめる幼い馨。

馨(幼) 「……」

屋敷の中から物音。戸を開けてそちらを覗き見る馨。そこには邊見家の家臣とは雰囲気

気の違う荒くれ者の浪人たちの姿。

馨 「!?!」

浪人1 「ん？何だガキ」

馨、浪人に見つかると戸を開けられそちら側の部屋に引つ張り込まれる。

馨(幼) 「きゃっ!!わ、私は……」

浪人2 「おい、こいつ邊見様の一人娘って奴じゃねえのか？」

浪人3 「これがか？どれ……」

浪人3、刀を抜くと馨の前に突き出す。驚き思わず尻餅をつく馨。

浪人3 「はははは、生意気に刀が怖いってのは分かるんだな」

浪人1 「つたり前だろ。大体死にのこなって全部を忘れちゃったってのだからって眉唾だ」

浪人2 「確かに。人斬りの一件だって邊見様の腰巾着、杉浦貞勝の謀（はかりごと）だって話もある」

馨(幼) 「貞勝？」

浪人1 「待て待て、だったら俺らは何で人斬り成敗になんて駆り出される」

浪人2 「噂を払拭する為に体裁だけでもって腹つもりだろ。ああ見えて抜け目のない……うわっ!?!」

貞勝がやってくる。浪人に刀を向ける。

貞勝 「無駄口を叩いている場合か。もうみな集まっているぞ」

浪人1 「ちっ、行くぞ」

浪人たちが去る。

貞勝 「怖い思いをさせてしまい申し訳ございませんでした」

馨(幼) 「貞……勝？」

貞勝 「そうです。ようやく覚えて下さりましたな。いや、思い出した……」

馨(幼) 「何を？」

貞勝 「いえ、何でもございませぬ」

馨(幼) 「どこかにいくの？」

貞勝「はい。馨さまのお父上、お母上の無念を晴らしに」

馨(幼)「父上……母上……」

貞勝「思い出さずとも結構。あのような酷き(むごき)光景……」

涙を浮かべる貞勝。

馨(幼)「泣いているの？」

貞勝「あの時、某が付いていればこのようなことは……否、少なくともまち様は……」

馨(幼)「泣かないで」

貞勝「……某は……泣いてなど……。それでは、行って参り……」

馨(幼)「待って！……嫌。一人は嫌。分かる……一人で置いていかれたらから私は追って……」

……そしたら……嫌。一人は……」

貞勝「……馨様」

馨(幼)「一人は……」

貞勝「亮順様、まち様亡き後、我らが大将は馨様に他なりません。馨様が言うことを……どうして某が違える(たがえる)ことが出来ましょう。……さあ、ともに参りましょう」

貞勝、馨の手をとる。

貞勝「残忍なる悪鬼を討ち取る為に」

貞勝が戸を開け放つ。中庭から見える空には満月が浮かんでいる。

○虎基の住む山寺(夜)

空には満月が浮かんでいる。屋根の上に立って竜臣が辺りを見回している。

竜臣「当たり前か。木ばっかで何も見えやしねえな」

下からはなが声を張り上げる。

はな「ちよつとアンタ。一体何考えてるワケ！折角人が逃げなつて忠告してやってんのにさ！ー！」

竜臣「うっせえな」

はな「杉浦って男は本気で邊見の仇を討つつもりだよ！金に糸目をつけずに腕に覚えのあるごろつきをかき集めてんだ」

竜臣「所詮ごろつきだろ」

はな「馬鹿！今度のはアンタがやってきた人斬りとはワケが違うだろ。隙をついて闇討ちすりゃあいんじゃない。真っ向から、しかも大人数で向かってこられる。戦だよ戦！」

竜臣「戦で結構。丁度……俺も殺やらないと死にじまう時期だったしな」

はな「何言ってるのさ！ー！」

竜臣「俺らの心配してる暇あったらおはなこそさつさと逃げな。お前だって俺らと同じだって思われてるんじゃないのか」

はな「言われなくなつたって逃げるわよ！でも……アンタらも逃げなさい。絶対死んだらダメだからね。アンタら兄弟はあたしの大切な金弦なんだ」

はなが去る。

竜臣「そうそう、お前は生きてくれ。アイツにとっての金弦でもあるんだからな」

馨が屋根にあがってくる。

馨「いた」

竜臣「何だ、どさくさに紛れて俺を斬りに来たか？」

馨「確かに今なら斬れるかもしれない。だって……何か不安な顔をしているから」

竜臣「ああ不安だ。また……アイツを失っちゃもうんじゃないかって怯えてる。出来ることなら助けて欲しいくらいんだ。馨……お前にな」

馨「私に？」

竜臣「お前、10年先から来たって言ってたろ。これから何が起きるか知ってるんじゃないのか」

馨「それは……私には言えません」

竜臣「連れない奴つちやな。……はあ。嫌だ。お願いだから……またアイツを失うようなことだけは勘弁して欲しいもんだ」

馨「虎基さんのことですか？」

竜臣「……ああ。本当なら俺は半年前に京でアイツを……虎基を失っていたからな……」

○半年前・京の路地裏（夜）

朔月（新月）の晩。数人の藩士たちを挟撃する竜臣と虎基。みるみる斬り捨てていく二人。

竜臣「いただき！」

虎基「兄上、一人そちらに」

竜臣「なっ！？しまった！」

一人の藩士は隙をつき逃げ出す。

虎基「待て！」

それを追う虎基。竜臣も追おうとするが、瀕死の藩士が竜臣の足を掴む。

竜臣「離せ！」

竜臣、藩士に一突きすると虎基を追う。

竜臣M「間に合わなかったんだ……そう、俺の目の前で……」

○半年前・京の路地

虎基を追って走る竜臣。曲がり角を曲がるとそこには追いかけていた藩士の亡骸。そして、それに覆いかぶさるように倒れる虎基。

竜臣「虎基！！」

虎基には一突きされた深い傷。虎基を殺した男は黒い頭巾を被っていて顔が分からない。黒頭巾の男、竜臣を見ると途端に同様した様子。慌ててその場から逃げ出す。

竜臣M「黒い頭巾を被った男に殺された。たった一人の血を分けた兄弟。そいつを助けられなかったんだ俺は……」

虎基の亡骸の前で頭を抱え絶叫する竜臣。

竜臣M「その不甲斐ない男のことがとことん嫌になった。自分だけのうのうと生きているそいつを許しておけなくなった。日に日に増したその思いの先。そう、俺はそいつを斬っちゃまおうって考えた」

○京からほど近い山中（夜）

夜空には上弦の月が浮かんでいる。

竜臣「でも……それすらも失敗した」

竜臣を背後から羽交い絞めにする男の人影。男は竜臣の首筋に噛み付く。

竜臣「暗がりの中で急に背後から男に羽交い絞めにされて、それで首筋を噛まれた」

横たわる白髪の老人の屍。老人は頬に刀傷がある。その脇に落ちる塗鬼の太刀と書状。

○元治元年・山寺の屋根の上（夜）

竜臣「振り返るとそこにはジジイの死体。それと塗鬼の太刀と……呪いについて書れた書状だけが落ちてた。そうして俺はどここの誰とも分からん男に無理矢理呪いを移された……幸運だったな」

馨「それで半年前に？」

竜臣「ああ。あの日あの場合にたどり着くと俺は真っ先に俺を殺した」

○半年前・京の路地裏

空に月はない朔月の晩。タイムトラベルしてきた竜臣、物陰に隠れると頭巾を被る。

馨M「え？」

竜臣M「当たり前だろ。同じ時に同じ男が二人いるワケにはいかない」

二人で歩くこの時代の竜臣と虎基。

タイムトラベルして来た竜臣、頭を押えて苦しそうな様子。それを振り切ると物陰からわざと物音をたてる。それに気づいたこの時代の竜臣が駆け寄ってくる。袋小路まで追い詰めるこの時代の竜臣。しかしそこにタイムトラベルして来た竜臣の姿はない。背後からそれを一閃するタイムトラベルしてきた竜臣。

竜臣M「ただ、一つ失敗しちまったのは……」

亡骸を人目のつかない場所まで運ぼうとしたところを虎基に見られてしまう。

竜臣M「アイツに見られた」

竜臣、咄嗟に虎基に斬りかかる。峰撃ちで気を失わされる虎基。

竜臣はこの時代の竜臣の亡骸を川に流す。

○元治元年・山寺の屋根の上（夜）

馨 「だから虎基さんから離れて……」

竜臣 「ああ、離れてようとアイツが生きてくれさえすればいい。俺はそういう風に時を塗り替えたんだ。そう思ってたさ……お前に会うまではな」

馨 「え？」

竜臣 「あんまり馬鹿にすんな。それくらい察しはつく。お前は俺や虎基の名を知っていた。ってことはその時の呪いはきつと10年先の俺がくれてやったもの……違うか？」

馨 「……だったら、何だというのです」

竜臣 「今の俺のことが憎くて仕方ない奴ってのは、10年先の俺なんだろ」

馨 「それは……」

竜臣 「構やしない。俺の考えることなんて想像がつく。きつと俺は時を塗り替えるのに失敗した。だからもう一度……それをお前に託した。そしてお前の目的は俺を討つこと。つまり……」

馨 「竜臣さん！！私は……私はあなたとの約束を必ず成し遂げます。私に言えるのは……それだけです」

竜臣 「……そうか。頼んだぞ。でだ、当面はこの危機を乗り越えないといけねえワケだが……奴らはいつどこから来る？知らねえか？」

馨 「月が隠れて雨が降り始めた頃……この山寺めがけて火が放たれる。その混乱に乗じて……」

竜臣 「ありがとよ」

竜臣が去る。

馨が竜臣からもらった書状を出す。

馨 「そう……そしてあなたはそこで誤って虎基さんを……だから、私は」

馨が空を仰ぎ見る。いつの間にか雲で覆われた空。ポツリポツリと雨が落ちる。

○山寺の前(夜)

月のない空を見つめる幼い馨。

馨(幼) 「貞勝」

貞勝 「雨……今が頃合いということか。いざ！仇を討たん！矢を放て！！」

山寺めがけて一斉に燃え盛る矢が放たれる。それと同時に浪人たちの怒号。

○山寺の中

虎基が辺りの異変に気づく。そこに竜臣がやってくる。

虎基 「兄上！」

竜臣 「ああ、仏さんに対して随分荒っぽいんじゃないかねえかこりゃ」

すると戸を蹴破って浪人たちがなだれ込んでくる。竜臣たちに斬りかかる。竜臣、虎基、すぐさま応戦する。次々と敵を斬り倒していくが、数的に圧倒的不利の為、徐々

に追い詰められていく。竜臣、虎基を庇おうとして体勢を崩してしまふ。

そこを浪人の太刀が襲う。どうにかかわすが目元を斬られる。血で染まる竜臣の右眼。

虎基「兄上！！」

竜臣「余所見するな！！」

そこに馨がやってくると次々と浪人を斬り捨てていく。二人の窮地を救う。

馨「大丈夫ですか！？」

虎基「お前！？」

3人となった竜臣たち、どうにか盛り返すと浪人たちを蹴散らす。

竜臣「これで終いか？」

馨「連中の目的は退路を塞いで私たちを焼き殺す事」

虎基「何を根拠に」

竜臣「いいからこいつの言うことを訊け！で、どうすりゃいい」

馨「あいつらは寺の裏口のことを知らない。私と竜臣さんがここで浪人どもを引きつけて

いる内に虎基さんは裏口から出て敵の大将の首を」

竜臣「おい。それで大丈夫なのか……助かるのか」

馨「私がどこから来たか忘れたのですか」

竜臣「分かった。虎基、行け！！」

虎基「しかし！！」

竜臣「俺を信じろ！」

虎基「兄上……あい分かった」

虎基が去る。徐々に火が燃え広がって行く。

竜臣「これで虎基は助かるのか」

馨「いえ、まだです」

馨が竜臣に塗鬼の太刀を向ける。

馨「高村竜臣は目に負った傷で視界が狭まっていたこともあり誤って高村虎基殺めるハ

ズでした」

竜臣「だからアイツを俺から遠ざけた。これでアイツは……」

馨「違います。竜臣さんが傷を負うのは今日ではなかったのです。あの日、邊見亮順を討

つ際に傷を負う筈でした」

竜臣「まで、そりゃどういっつた」

馨「時はそう簡単に塗り替えられるものではない。形を変え、いずれは同じ結果を招く…

…きつと」

竜臣「なるほどな。じゃあ俺ならその根から絶とうと考えるな」

馨「どうしてなのです。どうしてそんな傷を負ってしまったのですか。そうでなければ…

…私はこのようなことせずとも……」

涙ぐむ馨。

竜臣「泣いてるのか？」

馨「貴方は私を助けてくれました。いいえ、この後で助けられるのです。そして、まるで実の妹のように私を……愛して下さいました」

竜臣「そうか」

馨「今なら分かります。その愛情は本来は虎基さんに向けられるべきだったもの。だからこそ、私はそれを返さねばなりません。それこそが……竜基さんが下さった想いに報いる私のたった一つの術（すべ）なのです」

竜臣「折角久しぶりに人を斬って暫く生きながらえろと思っただけだな。残念だ」

馨「すみません」

竜臣「馬鹿言うな。詫びるのはこっちだ。……すまなかった。俺の勝手のせいだ」

馨「抜かないのですか」

竜臣「抜いたらお前を斬っちゃうだろ」

馨「ならば……参ります」

馨が竜臣に突きを放つ。燃え上がる炎が建物を崩しはじめる。

馨 嫌あああああ!!!

馨(幼) 嫌あああああ!!!

○山寺の外(夜)

雨は止み、満月の灯と燃え盛る寺の炎に照らされている。辺りには数人の浪人の亡骸。斬られた貞勝が倒れる。その亡骸の元で泣き続ける幼い馨。浪人と貞勝を斬った虎基は頬に刀傷を負っている。

虎基「すまない。拙者が斬れなかったばかりにまた辛い思いを……」

そこに馨がやってくる。

虎基「敵は全て斬り捨てた。これで終わりだ」

馨「ええ」

虎基「……兄上はいずこに？」

馨「……………」

虎基「……死んだ……のですか？」

馨「……………」

虎基「それとも……殺した……のですか？」

馨「……………私は」

虎基「そうですね。約束を遂げられたのですね」

馨「え!？」

虎基「貴方は拙者に隠しごとをしていませんでしたか」

馨「していました。……だってそれは貴方が知るべきことでは……」

虎基「しかし拙者はそれを知ってしまっていた」

馨 「は？何を……」

虎基 「嘘をついておりました。あの書状、目を通していないというのは嘘です。貴方が眠っている間に最初の3枚程はもう読んでおりました」

馨 「そんな……」

虎基 「ワケの分からないことが書いてある。何のイタズラかと思いましたが。けれど私はそれを出鱈目と思えなかった。だって、あんなに汚い字、私は他に見たことがなかったから」

馨 「分かったのですね」

虎基 「ええ、兄上の書かれた書状だと」

馨 「竜臣さんは……ズルい方です。自分の愛するものを殺める辛さを知っておきながら……それを私に押し付けるだなんて……」

虎基 「塗鬼に問います。拙者はこの結末に納得が行きませぬ」

馨 「初めてです……貴方と意見があったのは。それは……恐らくは……」

馨、刀を抜くと幼い馨に歩み寄る。

馨、苦痛で頭を押さえる。

虎基 「何をします」

馨 「この娘は私……私は本来なら竜臣さんに拾われて……そして私はここに来る。だから、ここで私を殺して……」

馨が太刀を振り下ろす。しかしそれを虎基が止める。

虎基 「それはおかしい。兄上のいないこの世で一体だれがこの子に塗鬼の力を移すというのですか」

馨 「じゃあどうすれば……」

虎基 「兄上が亡くなってもこうして貴方はここにいます。つまり……恐らくは時は塗りかえるものではない。新たな時として塗りなおすもの」

馨 「塗りなおす……」

虎基 「その力……拙者に頂きたい」

馨 「え？」

虎基 「その子を斬り己が命を棄てる覚悟がおりなのであれば、その命、その力、拙者にお預け頂きたい」

馨 「まったく、兄弟そろって勝手な事を言うのですね」

馨、虎基に歩み寄ると首元に噛み付く。みるみる白髪になる馨。馨、虎基から離れると塗鬼の太刀を差し出す。それを受け止めると苦しみだす虎基。虎基、それをどうにか振り切る。

虎基 「そうだ、頭巾、お借りしても宜しいですか」

馨 「え？」

虎基 「向うで自分に出くわしてしまったら困る。お願いします」

馨、袖から頭巾を取り出すと虎基に渡す。虎基、頭巾を被ると塗鬼の太刀を振りかぶ

り一閃。眩い光と共に次元が斬り裂かれ、時を渡るための入り口が現れる。

馨(幼) 「これは……」

馨 「!?ま、待って!!」

虎基 「大丈夫です。勝手な兄上を……正しに行って参ります」

虎基が入口の中に消えていく。辺りはさらに眩い光に包まれ、やがて光が収まるとそこにはなにもない。驚きみつめる幼い馨。

馨M 「こうして高村虎基は旅立った。あの勝手にズルいあの人。私の愛した……私を愛してくれたあの人を救う為に。けれど、果たしてあの人を救えたのかどうか、私たちの想いが遂げられたのか……私に知ることはできなかった。ただ、願うことしか」

仰向けに倒れる馨。馨を優しい月明かりが照らす。馨、ゆっくりと瞳を閉じる。そんな馨に近寄る幼い馨。馨のみつめていた先にある満月をじっとみつめる。

【終】

※ご利用上の注意※

- ・ 本脚本はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・ ご利用に当たつての改変などに制限は設けておりません。皆様のご都合に応じて自由に改変頂いてかまいません。
- ・ 本脚本をご利用頂く際は必ず作者 (gumba1227@hotmail.com) まで「」一報頂けますようお願い致します。
- ・ 但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・ 連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・ 仲間で集まつての練習でのご利用。
- ・ Skype などを紹介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・ ツイキャスやニコ生など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・ 連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をどちらかに記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)